

Title	Gallia 62号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2023, 62, p. 115-117
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/91103">https://hdl.handle.net/11094/91103</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 卒業論文要旨

モーパッサン『脂肪の塊』における食欲の描かれ方

安東 菜々子

『脂肪の塊』は食物に関する描写が多数登場する。本論文の目的は、こうした「食」や「食欲」の描写の働きを考察することである。そして最終的に、モーパッサンはただブルジョワジーに対する嫌悪からエゴイズムを暴こうとしたのではないと示したい。本作品は、全ての人間が等しく持つ「食欲」をもとに、だれもが平等に人間という「動物」である事を伝えようとしたのでないか。以上の仮説を検証するため、本論文において三部に分けて論を展開していく。

第1部では、具体的な料理や酒の名称と各人の属性との結びつきを確認した。娼婦が性的にも持参した弁当を食べられるという点でも利用・消費されているのだと「食」は示唆している。第2部では飲料について検討し、酒が人々を打ち解けさせ、物語を進行させる重要な小道具となっていると確認した。

加えて、「食」はセリフや行動からは読み取り切れない、「見えない軽蔑」を明らかにした。黙っていても「食」による人間性の暴露から逃れることはできない。

そして、第3部では食欲に食べていた原因について考察した。時・場所・社会情勢のすべてを上手く絡ませ、作者はキャラクター達を追い詰めたのだ。で

は、なぜモーパッサンが「食」にこだわり過酷な状況を作り上げたのか。それは、人間なら誰でも持っている本能を読者の前に示すためではないだろうか。

本作品が優れているのは「上流社会の悪を暴いた」点ではなく「階級に関係なく、誰もが本能をもった動物に過ぎないと示した」点にあるはずだ。「食」や「性」を巧みに用いて、モーパッサンほどのキャラクターも平等にその本能を描写した。『脂肪の塊』は人間という動物そのものを真っ向から描き、読者本人を含め誰もが等しく本能的であることを思い出させてくれる。そこに名作たる所以があると私は考える。

ボードレール『パリの憂鬱』における理想の地

久間 章 寛

本論では、ボードレールが『悪の華』と『パリの憂鬱』で描いてきた理想の地について、二つの詩集それぞれにおいてどのようなものであるか、そして、詩人が最終的には理想の地を放棄するのを確認し、そのことがどのような意味を持つのかを分析する。

第一章では、『悪の華』における理想の地を、初版から収録されている詩と、第二版で追加された詩とに分けて考察する。初版において、熱帯の異国の海辺が、理想の地として描かれ、詩人以外の人間が常に登場することがわかった。そ

して第二版で追加された詩では、夢想の世界に築き上げられる人工物の宮殿へと変化し、人間は詩人のみであり、それ以外の生命も失われていくという変化がみられた。

第二章では、『パリの憂鬱』における理想の地を、『悪の華』第二版発表の1861年以前初出の詩と、1862年以降初出の詩に分けて分析する。前者は、『悪の華』初版の影響が多分に表れており、熱帯の異国の海辺が理想の地として描かれている。同時に、韻文と散文双方に同じ題を持つ「旅への誘い」を通して、散文詩における空間描写の重要性の高まりも確認した。また、後者では、『悪の華』第二版と近い人工物の世界が楽園として描かれるのだが、夢想という詩人の内部世界ではなく、部屋という詩人の外部世界に現れるものであり、『パリの憂鬱』の制作動機である外部世界への関心が反映されていると考察した。

第三章では、理想の地の放棄について考察する。『悪の華』では、第二版で追加された「旅」という詩で、理想の地を探して旅をすることが無益であるという諦念が示され、完全に未知の世界へと飛び込む様子が描かれるが、これを韻文から散文への決定的な転換であると考察した。『パリの憂鬱』では、今までの章で見てきた楽園像がことごとく否定されているのを確認し、晩年のボードレルのベルギー滞在による落胆が、楽園は存在しないという結論を現実的に決定づけたものと分析した。

ラテン語とフランス語の動詞組織に関する比較言語学的考察—新約聖書『マタイによる福音書』をもとに—

前野 淳也

本論は、ラテン語からフランス語への動詞組織の変化を扱った論文である。特に、態・法・時制という文法カテゴリーの変化を分析対象とし、その形態論的な変化を追うことによって、その変化における特徴を明らかにすることを目指した。

そのようなラテン語からフランス語への言語変化の分析方法として、Edward Sapir が、*Language : an introduction to the study of speech* 『言語—ことばの研究史序説—』において言及した「総合的言語」と「分析的言語」という概念に触れた。前者は、「複数の概念を結合して単一の語にすることを全くしない言語（中国語）あるいは、節約しながらそうする言語（英語、フランス語）」のことであり、それに対し後者（ラテン語等）は、「概念がもっと濃密にむらがり、語はもっと豊富な内容を持っているが、しかし、概して、単一の語の具体的な意義の射程を適度な範囲に保とうとする傾向がある」と説明される。このような背景のもと、本論では、ラテン語からフランス語への動詞組織の変化において、「総合的」な体系から「分析的」な体系への変化という傾向があることを、「新約聖書『マタイによる福音書』」を例示しつつ論じた。態については、複合的な受動態の形成、形式受動態動詞の消失を、法・時制については、複合的な過去形や未来形・条件法の誕生について論じた。

また、論文の最後においては、新しい未来形や条件法などの「複合時制」の成立について、E. コセリウの説に基づき、「形態論的」な説明、「文体論的」、「意味論的」な説明の2つの説明を取り上げ、本論で扱った言語変化の原因についても考察を加えた。特に後者の立場から、コセリウは新しい複合的な未来形の誕生が、キリスト教的な価値観に基づく、「意図と精神的な義務としての、自覚した責任をもって向き合った「内的」未来」という新しい表現的欲求によって動機付けられているのだと主張した。